

市民活動展で紹介した千葉県の環境保全活動団体の環境学習について I

小川かほる

1 はじめに

千葉県環境研究センターの環境学習施設は、子どもから大人までの誰もが利用できる環境学習の場として運用している。1階の環境学習コーナーでは、2008年度から環境に関する企画展を開催している。この企画展の一環として、2009年度から環境保全活動団体等と連携し、市民活動展を開催した（第3章）。

市民団体の活動を紹介します。活動の広がりを目指すことを目的として、当センターが持っている環境学習についての知見や専門性を活用して、展示企画からパネル等の制作を協働で取組んでいる。

ここでは、2009年度に開催した市民活動展「フツー！の消費者と農家を結ぶー現地体験ふれあい型エコマインド“食ックツアー”ーもみがら食楽部」と「パートナーシップと環境保全の輪をひろげるーエコメッセ in ちばー」を開催するために収集した内容を紹介します。

2 調査方法

もみがら食楽部については、2009年11月に実施された食ックツアーに参加し活動状況を観察した。またヒアリングを実施し、さらに活動記録の提供を受けた。

エコメッセ in ちばに関しては、市民参加の視点からまとめた研究報告¹⁾を参考にした。また、2009年9月6日に、千葉県庁インターンシップ制度の研修生（芝浦工業大学システム工学部大塚翔太さん、日本大学生産工学部小野皓介さん）とともに、出展団体調査を実施した。また、実行委員の数名にインタビュー調査を行った。実行委員会が作成したエコメッセの変遷の記録²⁾の提供を受けた。

3 フツー！の消費者と農家を結ぶー現地体験ふれあい型エコマインド“食ックツアー”ーもみがら食楽部

3・1 もみがら食楽部

もみがら食楽部の設立と活動状況を紹介します。この市民団体は2007年度の千葉県エコマインド養成講座

（以下講座という）の修了生5人が結成した。安全な食にこだわる人と安全な食にこだわる人を理解したい農家の二人を中心に、多様な関心をもつメンバーが“食”を通してなら一緒に活動ができるとして集まった。

講座内の環境保全活動・環境学習プログラムの作成実習において、食の問題は生産者と消費者が遠く離れていることに原因があるとし、“普通の”消費者と生産者の出会いを図り、お互いの理解をすすめて、“食”を通じて環境への関心を広める事業企画が作成された。

講座発表会において紹介したところ、習志野市から依頼があり、地域の農家と消費者を結び付ける食ックツアーが2008年に実現した。

初期の食ックツアーではエコクッキングやエコイズ等の学習色が強かったが、習志野市の農地開発によって活動地の変更が余儀なくされ、鴨川市での“何も特別なイベントをしない活動”の模索を経て、ゆるやかに過ぎる時間のなかの農業体験に活動が変化した。また、耕作放棄地を耕し無農薬の稲作を開始し、除草作業や稲刈り体験などが食ックツアーに取り入れられた。無農薬の米づくりを通して、収穫量の減少、除草作業の問題に直面したメンバーは、消費者が支援する無農薬化の取組について検討している。

3・2 活動の評価

3・2・1 問題解決型の視点と活動

食の問題については、環境意識の高い消費者と生産者はつながっているものの、“普通の”消費者と生産者の相互理解が必要であるという課題意識から、お徳感のある活動を前面にだして普通の消費者を惹きつけ、農業の現場でゆったりと過ごす時間を提供している。問題の把握およびその原因の分析が明確であり、実際の農業の現場で課題解決に取り組んでいることが評価のポイントである。

3・2・2 体験から学びあう仲間

毎回のツアーの中で参加者の声を拾い、次の活動に活かすマネジメントができています。また「我々の活動

は進化している。いつも学びあっている」と言うように、学びあう仲間であるという共通認識ができていることが重要である。

4 パートナーシップと環境保全の輪をひろげる

ーエコメッセ in ちばー

4・1 エコメッセ in ちば

エコメッセ in ちばは、市民・企業・行政のメンバーで構成される実行委員会方式によって、1996年から千葉市幕張新都心において開催されている千葉県で最大の環境活動見本市である。環境保全の輪を広げることと、異なる主体間のパートナーシップを推進することの二つを目的としている

当初、実行委員となった市民は、合意形成トレーニングを含む対話を通して学ぶ参加体験型の講座の修了生が中心であった。企業・行政の実行委員は交代するものの、継続して参加している市民を軸に、真摯な対話と合意形成のプロセスを経て、役割分担に基づき、それぞれの責任を果たす協働が実現できている。

4・2 出展者団体調査結果

本調査は、出展団体に対し、出展内容（体験・実演、クイズ、景品、パネル展示、スタッフ等）について、アンケートおよび聞き取り調査を行い、97 団体のうち 79 団体（約 80%）から回答を得た。体験・実演を行っていた団体は約 4 割もあり、体験ができるブースは好評であった。クイズを実施した団体は全体の 15%と少なかったが、クイズをやっているブースには来場者が集まっていた。

調査できた出展団体の総人数は 495 人（平均 6.3 人）に及んだ。来場者数が 10100 人であり、出展者および実行委員、ボランティアスタッフを足すと約 11000 人が集ったイベントであった。

4・3 活動の評価

4・3・1 環境教育の場

エコメッセ 2009 in ちば実行委員会が、2009 年 9 月 6 日に会場で実施した来場者アンケート結果によれば、アンケート回答者 681 人うち 95%の人がエコメッセに参加することによって、環境に対する認識や考え方が変化したと回答している。その内訳を図 1 に示す。エコメッセは環境の大切さに気づき、環境のために行動

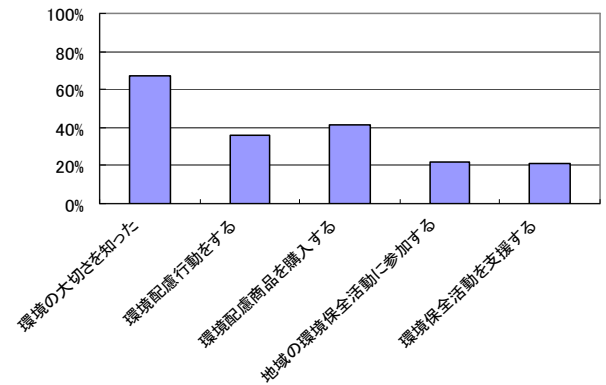


図1 環境に対する認識や考え方の変化(複数回答)

する人づくりを目指す環境教育の場となっているといえる。

4・3・2 市民主導の運営体制

市民がリーダーシップを発揮し、企業・行政が参加するエコメッセ in ちば実行委員会は、1 万人規模の動員力のある環境学習・啓発の場を運営する協働の先進事例である。エコメッセを開催することにより、セクターを超えたネットワークが広がると同時に、パートナーシップの理念の下、公共的活動に参加する市民の力が継続的に強化されている。

5 まとめ

市民団体の活動を紹介する企画展を市民団体と連携して行った。市民団体提供の資料に加えて、当センターがインタビュー等の調査をさらに実施し、パネルを制作した。展示パネルを作成する作業は、市民団体の問題意識と活動目的を明確にする共同作業であった。市民団体の活動を理解するためには、現場に直接出向き、その活動に参加し対話することが必須である。

引用文献

- 1) 小川かほる：環境教育と市民参加ー「エコメッセ in ちば」開催と「千葉県環境学習基本方針」策定経過から考えるー、千葉県環境研究センター年報第 7 号(平成 19 年度)、227-233 (2009)
- 2) エコメッセ in ちば実行委員会：エコメッセの記録 1996～2007
<http://www.ecomesse.com/ecomesse/about-ecomesse/ecomesse-document-download.html> (平成 22 年 9 月 22 日参照)